仏教における三明 (tisso vijjā) の成立

榎 本 文 雄

仏教における「三明 (tisso vijjā)」とは、周知のごとく修行の末に得られる解脱の知であり、原始仏典の散文經典以来、「宿命知 (自己の前世を知ること)」、「生死知 (衆生が自らの業に従って天界や地獄に輪廻して行く様を知ること)」、「漏尽知 (輪廻の原因である āsava¹⁾ からの解脱を知ること)」の三知を言う。ところで、これら仏教の三明は、既に中村、宮坂両博士が指摘されている如く²⁾、婆羅門教の三明 (trayī vidyā, リグヴェーダ, サーマヴェーダ, ヤジュルヴェーダ, 以上の三ヴェーダの知識) への批判として誕生したものであつた。しかし、仏教の三明がどのような背景で成立したか、また、原始仏典の中で三明がその後どのように展開して行つたかなど残された課題がある。この内、後者については別稿を期すこととし、本稿では前者に関して、仏教の三明の出発点である Saṃyuttanikāya (SN) の Sagāthavagga (Sg) の Brāhmaṇasaṃyutta を取り上げてみる。

SN の Sg は原始仏典の中でも古層に属する經典の一つである。その第7章の Brāhmaṇasaṃyutta (BrS) は、その名の示す通り婆羅門 (brāhmaṇa) に関する詩頌を含む経を集成したものであるが、内部には同一のテーマを持つ数経ずつの集団が見出される。それらの集団は、対応する漢訳の『雜阿含經』や『別訳雜阿含經』³⁾でもほぼ同様にまとまつており、部派分裂以前の、おそらく BrS の最初の編纂時にまで遡るものであろう。その内、まず「怒り (と忍耐)」という婆羅門に関係の深い⁴⁾テーマを持つた数経が BrS の冒頭に置かれ、次に「婆羅門批判」をテーマにした経群 (SN 7.1.7~9, 7.2.1) が続く。ところでこれらの経は、ジャイナ古経の中で婆羅門批判で有名な Uttarajjhāyā (Utt) 12章や25章、さらに Isibhāsiyāim (Ibh) 26章と共通点が多い。この内 Utt 12章と25章は、つとに J. Charpentier が指摘した⁵⁾ように、それぞれ仏典の Jātaka 497 や Dhammapada (Dhp) の Brāhmaṇavagga (BrV) と共通する偈を持つ。後者に関しては、Utt 25.23, 25, 27 が、それぞれ Dhp 405, 409, 401 とパラレルで、真の婆羅門像を説いており、このパラレル部分が核となつて Dhp BrV が成立している。また、Utt 25.33a と Suttanipāta Vāseṭṭhasutta の 650c も共通し、「行為によつて真の婆羅門となる」と説く。一方 BrS に目を戻すと、SN 7.1.7 では、「ヴェーダの知識と

祭式などの実践 (vijjācarāṇa) を完全に備えた婆羅門のみが浄化される (sujjhati)』と主張する婆羅門に対して、「クシャトリア、婆羅門、ヴァイシャ、シュードラ、賤民、以上いずれであろうと修行に励めば清浄 (suddhi) になれる」という世尊の説法が見られる。同様に Ibh 26.15 でも、以上の 4 varṇa のいずれであろうと修行に励めば浄化される (visujjhati) と説かれている。次に、SN 7.1.8 や 7.1.9 では Utt 12 章や 25 章と共通の構造が見られる。すなわち、祭式をしている婆羅門の所へ乞食に来て、婆羅門という身分 (jāti) やヴェーダの知識 (vijjā) を備えていないという理由で乞食を拒否された世尊や苦行者が、真に乞食を受けるに値する人をめぐって説法をし、その婆羅門を帰依させるという共通の内容が見られる。また、その一部は既に指摘されているように⁶⁾、SN 7.1.9 と Utt 12.38, 44, 46, また SN 7.2.1 と Ibh 26 章, 32 章はパラレルな偈を伝えている。前者では、祭火や沐浴によつては表面的な清浄 (suddhi, sohi) しか得られないと批判され、内面的な祭火への献供や沐浴が説かれる。後者では、内面的な耕作としての修行が説かれる。このように、婆羅門批判をテーマにした BrS の以上の経はジャイナ古経の Utt 12 章, 25 章, Ibh 26 章, 32 章などと共通する要素を踏まえて成立しているのである。そして、このジャイナ古経と共通な婆羅門批判の一環として、既に指摘されているように²⁾ SN 7.1.8 では婆羅門教の三明 (三ヴェーダの知識) が批判され、仏教の三明が宣言される。以下にこの経を検討してみる。

乞食に来た世尊に向かつて婆羅門が語り、これに対して世尊が反論する。

tīhi vijjāhi sampanno jātimā sutavā bahu/

vijjācarāṇa⁷⁾sampanno so 'maṃ bhuñjeyya pāyāsaṃ//

三ヴェーダの知識が完全に備わり、生まれよく、多く学習し、ヴェーダの知識と祭式などの実践を完全に備えた人のみがこの乳がゆを食べることができる。

bahum pi palapaṃ jappaṃ na jaccā hoti brāhmaṇo/

anto kasambusaṃkiliṭṭho kuhanā parivārito//

pubbenivāsaṃ yo vedi saggāpāyaṃ ca passati/

atho jātikkhayaṃ patto abhiññā vosito muni//

etāhi tīhi vijjāhi teviṃso hoti brāhmaṇo/

vijjācarāṇasampanno so 'maṃ bhuñjeyya pāyāsaṃ//

(ヴェーダのごとき⁸⁾) たわごとを繰り返して唱えたところで、内面は腐り汚れ、(表面を飾るだけの) 欺瞞におおわれている人は、たとえ身分 (が婆羅門) であつたとしても、真の婆羅門とは言えない。前世の生涯を知り、天界と地獄を目のあたりに見、再生の消

(41) 仏教における三明 (tisso vijjā) の成立 (榎 本)

滅の達成を知り、(修行の) 完成した沈黙の聖者こそ、この三知によつて(真の) 三明を持つ(真の) 婆羅門である。(この三) 知と(修行の) 実践を完全に備えた人がこの乳がゆを食べることができるのである。

以上のように、ヴェーダ批判として前世知などの三知が真の三明と宣言され、この SN 7.1.8 で仏教の三明が成立する。では、仏教の三明の内容として、何故、前世知などが特に選ばれたのであろうか。まず考えられることは、仏教が、そもそもの出発点からして、輪廻からの解脱を目的としていたという点にある。上に掲げた仏教の三明の内、第1知の前世知や第2知の天界・地獄を見るということは、輪廻の様子をじかに体験することに他ならず、第3知の再生の消滅を知るということは、前二知で体験した輪廻からの解脱を得ることである。婆羅門教において三ヴェーダの知識が最高であつたように、仏教では輪廻を知ることが最高の知であると考えられたのであろう。

しかし、三明の第1に前世知が置かれていることには別の背景があるように思われる。婆羅門教においては、ヴェーダの誦唱 (japa) などによつて罪からの浄化があり⁹⁾、さらにそれによつて前世の想起が得られると考えられていたからである。たとえば、マヌ法典では、snātaka (師の許での学習を終え、沐浴の儀式を終えて、家に戻った人) の義務の一つとしてヴェーダの誦唱があり、それによつて彼は前世を想起できると説かれている。

vedābhyāsenā satatam śaucena tapasaiva ca/
adroheṇa ca bhūtānām jātiṃ smarati paurvikīṃ// (4.148)

また、Vāsiṣṭhadharmasūtra など¹⁰⁾では、諸々のヴェーダのマントラを唱えることによつて人は浄化され、望めば前世を想起できると説かれている。

trīṇy ājyadohāni rathantaram ca agnervratam vāmadevyaṃ brhac ca/
etāni japtāni punanti jantūṃ jātismaratvaṃ labhate yadicchet// (28.15)

その他、Atharvaparīśiṣṭa 42.13 でも、沐浴の儀式を済ましてヴェーダを唱えることによつて前世を想起できると説かれ、原教授が指摘されている¹¹⁾ように Mahābhārata 3.82.137 では沐浴により前世が想起されると述べられている。また、ジャイナ古経においても心の浄化によつて前世の想起がおけると説かれる¹²⁾。このように、前世の想起は「浄化」と密接な関係にあるものと広く考えられ、とりわけ婆羅門教では、ヴェーダ誦唱による浄化を重視していた。

このような、ヴェーダ誦唱に関する婆羅門教の信仰に対して仏教は痛烈な批判を浴びせる。先に紹介したように、BrS の婆羅門批判では常に「浄化 (suddhi)」

が問題になっていたが、特に SN 7.1.8 では、ヴェーダを唱え (jap-) ても、内面は汚れたままの人は真の婆羅門ではないと批判され、反対に沈黙の聖者 (muni) で前世知などを持つ人が真の三明を持つ婆羅門であると宣言されている。ここには、ヴェーダを唱えない muniこそが、内面の浄化を得て前世を想起するということが説かれていると言える。ゆえに、仏教の三明の内容、特に前世知は、ヴェーダ誦唱への批判として仏教の三明の成立にとつて不可欠の存在であつたと考えられる。以上の点は他の資料からも確認できる。Aṅguttaranikāya 3.58, 59 経では、上の SN 7.1.8 と共通する詩頌が説かれた後、「(ヴェーダのごとき) たわごとを繰り返す人 (lapitalāpana) を真の三明を持つ人とは呼ばない」と結ばれる。

最後に、仏教の三明のその後の展開を示す詩頌を挙げて結びにかえる。SN 7.1.8 と同一の偈が仏陀の解脱知の内容として修行の完成を示している。

pubbenivāsaṃ yo vedi saggāpāyaṅ ca passati/
 atho jātikkhayaṃ patto abhiññā vosito muni//
 cittaṃ visuddhaṃ jānāti muttaṃ rāgehi sabbaso/
 pahīnajātimaṃ brahmacariyassa kevali/
 pāragū sabbadhammānaṃ buddho tādi pavuccati// (MN vol. 2, p. 144)

- 1) 拙稿「āsrava について」(『印度学仏教学研究』27-1, pp. 158~159), 「āsrava (漏) の成立について」(『仏教史学研究』22-1, pp. 17~42) 参照。
- 2) 中村元『原始仏教の思想』上, p. 402 ff, 宮坂宥勝『仏教の起源』, p. 186 ff.
- 3) この2経の部派帰属に関しては、拙稿「Udānavarga 諸本と雑阿含経, 別訳雑阿含経, 中阿含経の部派帰属」(『印度学仏教学研究』28-2, pp. 931~933) 参照。
- 4) 原実「文武」(『日本仏教学会年報』36, pp. 1~31) 参照。
- 5) 'Studien über die indische Erzählungsliteratur', ZDMG 63, pp. 171~188, 'Zu Uttarajjhayaṇa XXV', WZKM 24, pp. 62~69.
- 6) 本庄良文「初期仏典における『沐浴者 (snātaka)』」(『仏教論叢』23, pp. 99~102), Seiren Matsunami, 'Buddhist Variants of two Portions of the Isibhāsiyāim, (『印度学仏教学研究』9-2, pp. 741~748)。
- 7) 婆羅門教文献においても、たとえば MBh 13.59.1 には、布施に値する人として vidyā や caraṇa を備えていることが明言されている。
 yas tu syātām caraṇenopapannau yau vidyaya sadṛṣau janmanā ca/
 tābhyam dānaṃ katarasmai viśiṣṭaṃ ayācamānāya ca yācate ca//
- 8) jap- はヴェーダのマントラを唱えること示す場合が多い、PTC, s. v. jap(p)ati. Cf. vedāyasacchāstrapralāpa (Abhidharmakośabhāṣya p. 241. 17).
- 9) Cf. P. V. Kane, *History of Dharmasāstra* IV, Section I.
- 10) 他に Viṣṇusmṛti 56. 27.
- 11) 原実「生苦」(『玉城康四郎博士還暦記念論集 仏の研究』所収) p. 683 注(56)。
- 12) Utt 19. 7.

(京都大学大学院)